

「互いにつぶやき合っはいけません」ヤコブ5：9 11・12・18 I「互いにつぶやき合っはいけません」：9。私たちは、困難や耐え忍ぶことが長くなると、人のせいにして、つぶやき合い易くなる。不平や文句を言い易くなる。本当にそうである。そのことが戒められている。つぶやく時間があるなら、その代わりに、すべてを見、知り、支配しておられる神に愛と信仰を持って祈りたい。「いつでも祈るべきであり、失望してはならない」(ルカ18：1)。また、試練の中でも、与えられている主の恵みを数え感謝したい。「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現れるからである」(Ⅱコリ12：9)。「主の良くしてくださったことを何一つ忘れるな」(詩103：2)。つぶやく前に、主にあるお互いに、神が与えられている良い所を見、互いに励まし感謝したい。「むしろ、感謝しなさい」(エペソ5：4)。Ⅱ「さばかれないためです」：9。さばかれないためです→①つぶやき、人をさばく人は、自分もさばかれる。いつも人に批判的で人のあら捜しをする人は、自分にも批判を招き寄せる。人の心は離れて行く。人は、自分のことも他の所で悪く言われると気づくからである。悪口の交わりは、真の信頼関係を生み出す事ができない。いつも人を批判している人は、自分に加えられる批判に敏感となる。自分が批判を受けると、すぐにつぶやき、文句を言う。しかし、自分が人を批判している場合には、少しもそのことを心に留めているようには見えない。いつも人を批判している人は批判し返される。②つぶやき、人を批判し、人をさばく人は、すべてを見、聞き、知っておられる神に必ずさばかれる。厳粛な事実がある。私たちは、うわさや悪口や片方からの情報だけで、ある人を悪いと決めつけ、悪く言う事を控えなければならない。すべてを見、知り、正しく判断されるのは神である。「あなたがたは、主が来られるまで、何についても、先走ったさばきをしてはいけません。主は、やみの中に隠れた事も明るみに出し、心の中のはかりごととも明らかにされます」(Ⅰコリ4：5)。私たちは、父なる神が自分を見ていて下さる事を、常に心に留めるべき。「心に満ちていることを口が話すのです…人はその口にするあらゆるむだなことば(悪口、つぶやき、批判等)について、さばきの日には言い開きをしなければなりません」(マタ12：34、36)。私たちは、御父の目のもとに主の初臨(クリスマス)と主の再臨(救いの完成とさばきの日)の間を歩んでいる旅人。「さばいてはいけません。さばかれないためです。あなたがたがさばくとおりに、あなたがたもさばかれ、あなたがたが量るとおりに、あなたがたも量られるからです」(7：1、2)。人を厳しく批判している人は、その同じ量り、基準で厳しく神にさばかれる。神によってこれまで、数えきれない罪を赦された私たちへの御言葉→「お互いに親切にし、心の優しい人となり、神がキリストにおいてあなたがたを赦してください

ったように、互いに赦し合いなさい」(エペ4：32)。「なぜあなたは、兄弟の目の中のちりに目をつけるが、自分の目の梁(大木のような罪)には気づかないのですか。…偽善者たち。まず自分の目から梁を取りのけなさい」マタ7：3, 5。私たちの目は、外に向いているので、人の目の中のちり(欠点)が見え易く、非難するが、自分の姿、心の中のさばき、恨み、ねたみには気づかない、悔い改めようとしなさい。自分の事を棚に上げて、人の事を悪く言い、非難するのではなく、まず自分自身がすべてを見抜いておられる神の前に出て自分自身の罪を告白し悔い改めたい。そのようにして神の大きな愛と赦しを受ける時、人に対して心の優しい人に変えられ続ける。また、私たちが物事を正しく判断するとい事と人をさばく、非難する罪との違いは?※さばく(原語の意：判別、識別する、判断する。→その動機と目的である。聖書が禁じている、人をさばく、あら捜しする、つぶやく、非難する事は、その目的が、物事を解決することではなく、その人自身を攻撃する、物事の判断ではなく、人格を否定する、その人を倒す事だからである。私たちは、その人の人格、その人自身を愛する事とその人の行動の誤りを愛を持って正す事を区別できるように心から祈り主に拠り頼みたい。意見が違って互いに愛し合う事ができる。主にあつて。柔和な心で、当の本人にあやまちを正す事は、さばく事ではなく、真実な愛である。ガラ6：1。主にあるお互いが愛をもって真実に向き合い語り合う事は、成長をもたらす。他の人に悪く言いふらすことが主にある交わりを壊す罪である。相談とさばく事は違う。Ⅲ「見なさい。さばきの主が、戸口のところに立っておられます」。クリスマスに來られた(初臨)主は、もう一度來られる(再臨)。救いの完成とすべてを正しくさばくために來られる。戸口の所に立っておられる。この2千年間、一日一日來るべき主の足音は近づいている(その時がいつかは人間にはわからないが)。最後にその主が靈的なドアをノックされる時、私たちは開ける準備をしていなければならない。「なぜ、あなたは自分の兄弟をさばくのですか。また、自分の兄弟を侮るのですか。私たちはみな、神のさばきの座に立つようになるのです。…私たちは、おのこの自分のことを(あの人はあんな事をしてましたよではなく)神の前に申し開きすることになります」ローマ14：10、12。主の愛を受けて、人を非難するのではなく、まず自分の罪を悔い改め、互いに愛し合い、赦し合いながらクリスマスと再臨の主の到來を待ちたい。「しかり。わたしはすぐに来る。」アーメン。主イエスよ、来てください。主イエスの恵みが、すべての者とともにあるように。アーメン。」黙22：20, 21。主の初臨と再臨の間に主によって生かされている事を覚えつつ、アドベント(待降節。クリスマスの日を待ち、また主の再臨を待つ)を過ごしたい。「万物の終わり(主の再臨)が近づきました。…互いに熱心に愛し合いなさい」Iペテ4：7, 8